

フレッシュマンキャンプと大学生活適応に関する研究

林 綾子¹⁾ 宮本 友弘²⁾Study of the Relationships between a Freshman Orientation Camp
and Well-adapted College Life

Ayako HAYASHI Tomohiro MIYAMOTO

Abstract

This study was conducted as a first step for the examination of effects of the freshman orientation camp (FC) on students' well-adapted college life. Three months after the first-year students participated in the program, they were asked to answer their states of school adjustment including their satisfactions of their school life, anxieties of their study, personal growth, utilization of the FC, and other variables. In addition to these, the Japanese version of the Social Provision Scale was tested for future administration, since it has been widely used all over the world and the development of social provision was reported through outdoor orientation programs in the United States.

From the results of analyses, the effectiveness and some issues of the Social Provision Scale were found especially subscales. In this study only total score of the social provision were used for analyses. The score of social provision was significantly positively correlated with all factors of the school adjustment including comfortability at school, a sense of being trusted, possession of goals, and absence of a sense of inferiority. Furthermore, students who had higher levels of social provision showed higher levels of satisfaction in their school life, more opportunities to utilize their abilities at school, higher levels of pride regarding their school, and higher levels of personal growths. In relation to the utilization of the FC, students who felt higher levels of utilizations of the FC showed higher levels of school adjustments, more opportunities to utilize their abilities at school, more pride in their school, and higher levels of personal growth.

The results of this study implied the contributions of the FC on students' well-adjusted school life, excluding the aspect of academic achievement. At same time, the improvements of the Japanese version of the Social Provision Scale and future examinations to prove the effects of the FC are necessary for future study.

Key words : freshman orientation camp, freshman seminar, social provision, school adjustment

1. はじめに

我が国の大学進学率は、1999年には概ね50%に達し、今後もさらに上昇するものと予測されている(山田, 2007)。高等教育のユニバーサル化の進行に伴い、大学入学者の学力だけでなく、学習意欲、学習目的、学習習慣、規範意識といった面においても、さまざまな問題が顕在化し、受け入れる大学側の対応が求められている。学生にとっても、高校生から大学生になるというのは大きな環境変化であり、その移行に困難を経験する者も多い。近年、我が国における大学の卒業率は下降傾向にあり、2000年には8割を切るに至ったが、その背景として、濱名(2005)は大学新入生の適応や学業継続率に内在化する問題を指摘している。新入生の大学生活への適応へ影響を与える要因として、主に学習面と対人関係が挙げられている(岡田, 2006; 濱名, 2005)。

このような状況に対して、大学では様々な初年次教育を実施するようになり、わが国で何らかの初年次教育を行っている大学は、全国で7割を超えている(近田, 2007)。初年次教育(First Year Experience)とは、「高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」(濱名, 2007)と定義付けられている。ここでいう“成功”とは、学生が大学進学によって目指している目標、すなわち(1)学問的・知的能力の発達、(2)人間関係の確立とその維持、(3)アイデンティティの発達、(4)キャリアと人生設計の決定、(5)肉体的・心理的健康の保持、(6)人生観の確立、の実現に向けて順調に進んでいくこと、とされている。近田(2004)は、初年次教育の3要素を「大学生活への適応」、「基礎的学習スキル」、そして「人格の形成」であると説明している。

初年次教育は、アメリカにおいて1970年代より先進的に取り組まれ、成果をあげてきたことから、いまや世界的なレベルに広がっている。わが国では、1990年代後半になって認識されるようになった(近田, 2004)。2008年には初年次教育学会も発足しており、大学における学士課程教育を有効に機能させる上での「基盤」としてなくてはならない教育プログラムという位置づけが一般化しつつある。

実際に行われている初年次教育の具体的内容は、(1)大学生生活への適応、(2)学習スキルの習得(リーディング、レポートライティング、批判的思考力、調査、プレゼンテーション、タイムマネジメントなど)、(3)当該大学についての理解と適応、(4)自己分析、(5)人生設計・キャリアプランづくりへの導入、(6)学習目標・学習動機の獲得、(7)専門教育への導入など、多岐にわたっている(太田, 2010)。多くの大学で共通している点は、大学での学びのスキルの学習と少人数体制で行われているということである。その内容や形態はさまざまであり、それぞれの大学に入学してくる学生の特色に応じて、また大学の持つ特色や目指すものに応じてカスタマイズすることが重要とされる。

アメリカ等諸外国では、特に人格形成と人間関係構築を目的とした初年次教育プログラムとして、野外・冒険教育的なプログラム(Outdoor/Wilderness Orientation Program)が幅広く行われている。それらの効果として、参加学生の自己に関する概念の向上、好成績、退学率の低下、忍耐力の向上、友人関係の充実、卒業までの在学年数の短さ(早期修了・留年率の低下)などが報告されている(Bell, 2006)。さらには、卒業後17年たってからも人生に与えている影響についての報告もある(Gass, 2003)。わが国においても、新入生オリエンテーションキャンプを初年次教育として取り入れている大学は多く、単位化しているものとしていないものがあるが、

大学の理解や教員との交流、人間関係の構築などの効果が報告されている（明石，2002；出野，2003）。

びわこ成蹊スポーツ大学においては，2003年の開学以来初年次教育には力を注いでおり，特に入学直後に行うフレッシュマンキャンプ（以下FC）では自己の成長，人間関係作り，地元の自然環境の理解・活用を目的として，3泊から4泊の日程で冒険教育要素を取り入れた実習を行っている。この効果として，情動知能の向上が報告されている（黒澤ら，2004）。また，卒業生アンケートからも，FCを全体の40%の学生が4年間で最も印象に残っている授業としてあげており，キャンプ経験が意欲の向上や仲間作り，教員との交流など，学生生活の満足度の向上へ影響したという回答が多くみられる。本学は人格形成と人への思いやりを建学の精神としていることから，FCの重要性や効果は教員・学生共に認識されている。しかし，今後のより効果的な展開のためには，学生の自己形成や学生生活適応にどのような影響を与えているかをより詳細に調べる必要があると思われる。

そこで，本研究は将来的な効果測定へ向けての第一段階として，FC終了後3ヶ月半（前期）経った時点での大学生活適応・充実状況の調査を行い，FCが貢献する可能性について探索した。また，大学生活適応の二大要素のうち，とくに人間関係構築への貢献に着目し，新たな適応に関する指標として，日本語版社会的被支援尺度（Social Provision Scale）の開発も試みた。

social provisionとは，social supportと類似した概念として用いられることも多いが，social supportは家族や友人，隣人など，ある個人を取り巻く様々な人々からの有形・無形の援助をさすもの（Caplan，1974）と理解されており，一方，social provisionは，他人との人間関係からどのようなものが与えられているかを表している（Wiess，1974）。すなわち，被支援者の立場からみた対人関係の利用

可能性を表しているもので，本研究においては，「社会的被支援」と訳することとした。Weiss（1974）は，心身の健康にとって基本的な機能として，社会的被支援の種類を，（1）アタッチメント，（2）社会的統合，（3）養育される機会，（4）自分の価値に対する保証，（5）信頼できる味方がいるという感覚，（6）指導・ガイダンスを得ること，の6項目あげている。これらの特徴として，多くの他のsocial supportは社会環境の中での社会的支援の傾向としてみているが，social provisionという概念においては，社会環境の中にある資源として扱い，それは個人が開拓し，利用しなければならないものとされる。開拓された社会的被支援を利用することによって，個人は，ストレスや困難へ対応したり，周りの環境へ適応できると考えられている。

Bell（2006）は，6つの異なるタイプの初年次教育プログラムを比較し，自然環境の中で行う野外教育プログラムの参加者が社会的被支援の得点がもっとも高かったと報告している。野外教育的な初年次教育の特色を表すものとして参考になる資料であり，わが国での同様のプログラムにおける効果と，実際に大学適応への影響を検討していく必要があると思われる。このような背景から，本研究では，日本語版社会的被支援尺度の開発を試みた。

2. 研究方法

（1）調査対象

2007年度FC参加者のうち3年次編入生を除いた315名にFC終了後3ヶ月半経った前期日程終了時（7月末）にアンケート調査を行った。

（2）FCプログラムの概要

2007年度のFCは，8クラス毎にA・Bコースに分かれて3泊4日のプログラムを実施した。各クラス（30名程度）が2班に分かれ，

宿泊施設とテントを利用した共同生活を行った。その内容は、アイスプレーキング（初めての人・環境での緊張をほぐすためのゲーム）、テント設営、自然の中で仲間と協力して課題に取り組むことで人間関係を構築する仲間作り野外ゲーム、野外炊事、班毎で困難に挑戦する登山、自然の中でのクラス対抗レクリエーション、キャンプファイヤー、ふりかえりであった。全体的なプログラムの運営や活動の指導は、学内野外スポーツ専門教員が行い、各班に野外スポーツコース3・4年次生が一人ずつサポートにつき、実施した。

(3) アンケート調査内容

アンケート調査内容には、現時点でのFC役立ち度（6件法）とその具体的内容（自由記述）、加えて学校生活への満足度（0～100%で評定）、勉強への悩み、力を発揮できる機会、学校に対する誇り、自己の成長を問う4項目（各6件法）を用いた。

学校生活適応・充実に関する尺度として、大久保（2005）の作成した「学校への適応感尺度」（4因子30項目5件法）を用いたが、回答が中間に集中することを防ぐため、6件法に修正した。4因子は、「居心地のよさの感覚（11項目）」、「課題・目的の存在（7項目）」、「被信頼・受容感（6項目）」、「劣等感の無さ（6項目）」から成り立っており、それぞれにおける妥当性や信頼性、男女差や学校の差が報告されている（大久保，2005）。

さらに、CutronaとRussell（1987）作成のSocial Provision Scale（6因子24項目4件法を6件法に修正）を筆者らが日本語訳した「社会的被支援尺度」を用いた。6因子はWeiss（1974）の提示した6つの機能であり、それぞれ4項目ずつであった。この尺度は世界的に幅広く用いられ、その信頼性・妥当性は確認されている。

(4) 有効回答

回収された315名分の回答のうち、信頼性

に欠く回答や未回答項目を多く含む回答を取り除き、最終的に258名（男208名、女55名）の回答を分析対象とした（有効回答率81.9%）。

3. 結果と考察

(1) 測定尺度の構成

① 学校への適応感尺度の構成

学校への適応感尺度（SA）30項目について、主因子法による探索的因子分析を実行した。固有値の減衰状況と解釈可能性から4因子構造が妥当と考えられた。プロマックス回転を用い、因子負荷量と項目内容から7項目を除外し、再度因子分析を行なった。表1は、回転後の因子パターンと因子間相関を示したものである。

いずれの因子も、オリジナルの因子と同様であったので、そのまま命名し、また、各因子に負荷量の高い項目から、下位尺度を構成した。各下位尺度の内的整合性（ α 係数）は、①居心地のよさ（10項目）.94、②課題・目的の存在（5項目）.88、③被信頼・受容感（5項目）.88、④劣等感の無さ（3項目）.74であり、十分な値であった。

② 社会的被支援尺度の構成

社会的被支援尺度（SP）については、天井効果のみられた1項目を除外し、主因子法にて探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況から3因子構造が示唆されたが、因子間相関が著しく高かったため、今回は下位尺度を構成せず、全体として1つの尺度として使用することとした。信頼性（内的整合性）を確かめるために、項目－全体（I-T）相関係数を計算すると、著しく低い項目が1項目見られたため、この項目も削除した。最終的に22項目を採用することとした。それらのI-T相関係数は $r = .338 \sim .776$ 、また、信頼性の $\alpha = .925$ と十分な値であった。

(2) 各項目・尺度の相関分析

それぞれの関連を調べるために、Pearson

表1 S Aの回転後の因子パターンと因子間相関

項目	I	II	III	IV
居 23 リラックスできる	.916	-.119	-.097	.040
居 19 ありのままの自分を出せている	.884	-.116	-.042	.036
居 21 周りに共感できる	.763	-.035	.120	-.195
居 15 自分と周りがかみ合っている	.754	.186	-.141	.060
居 27 安心する	.717	.254	-.028	-.204
居 11 自由に話せる雰囲気である	.710	-.052	.164	.039
居 5 周囲となじめている	.692	.107	-.002	.081
居 1 周囲に溶け込めている	.653	.065	.059	.121
居 9 周りの人と楽しい時間を共有している	.651	.026	.201	-.076
居 25 幸せである	.526	.205	.048	-.020
被 7 周りから期待されている	-.115	.815	.063	.021
被 13 周りから必要とされていると感じる	.066	.760	-.015	.022
被 17 周りから関心をもたれている	.055	.744	.016	.022
被 28 よい評価がされていると感じる	.011	.743	-.054	.015
被 3 周りから頼られていると感じる	.046	.686	.061	.001
課 6 これからの自分のためになることができる	.039	.001	.891	-.085
課 2 将来役に立つことが学べる	-.057	.024	.866	-.076
課 10 やるべき目的がある	-.090	.008	.776	.074
課 26 熱中できるものがある	.061	.073	.603	.044
課 16 成長できると感じる	.264	-.065	.599	.082
劣 8* 自分だけだめだと感じる	.071	.051	-.115	.730
劣 4* 周りに迷惑をかけていると感じる	-.183	.025	.003	.701
劣 30* 自分が場違いだと感じる	.136	-.028	.204	.623
因子間相関				
I	—	.710	.696	.444
II		—	.516	.459
III			—	.406
IV				—

*は反転項目

表2 平均値と相関係数 (n=258)

	平均値	SD	SP	SA 居心地	SA 被信頼	SA 課題	SA劣 等感無	満足 度%	悩み	力発揮 機会	学校 誇り	自己 成長	FC 役立ち
SP	4.5	0.65	1	.631**	.552**	.466**	.460**	.277**	-.043	.404**	.268**	.172**	.296**
SA居心地	4.4	0.89	—	1	.686**	.681**	.408**	.539**	-.109	.538**	.463**	.267**	.462**
SA被信頼	3.7	0.84	—	—	1	.502**	.422**	.441**	-.212**	.533**	.434**	.340**	.328**
SA課題目的	4.9	0.83	—	—	—	1	.391**	.467**	-.051	.506**	.485**	.322**	.364**
SA劣等感無	3.9	1.00	—	—	—	—	1	.292**	-.329**	.389**	.211**	.239**	.159*
満足度%	66.4	21.20	—	—	—	—	—	1	-.163**	.449**	.477**	.393**	.413**
勉強への悩み	4.0	1.21	—	—	—	—	—	—	1	-.115	-.002	-.031	-.010
力発揮機会	4.0	0.98	—	—	—	—	—	—	—	1	.521**	.370**	.360**
学校誇り	4.3	1.10	—	—	—	—	—	—	—	—	1	.468**	.351**
自己成長	3.9	1.08	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	.185**
FC役立ち	4.2	1.32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1

**. 相関係数は1%水準で有意 (両側). *. 相関係数は5%水準で有意 (両側).

の積率相関係数を算出した(表2)。SPに関しては、勉強への悩みや不安以外のすべての得点と有意な正の相関関係が確認された。このことから、6つの種類の社会的被支援について、より自分自身が周囲の人間関係から支援されていると認識している学生の方が、大学が居心地のよい場所と感じ、それぞれの課題や目的が明確であり、まわりから信頼されていると感じ、劣等感が少なく、大学生生活全般に満足度が高く、大学には力を発揮できる機会があり、大学を誇りに思い、大学に入ってから自分が成長していると認識していることがわかった。また、今回の結果からだけでは因果関係は証明できないが、FCが役に立っているという項目とも有意な正の相関がみられたことから、FCがきっかけとなり、社会的被支援の人間関係を形成・発展させたのではないかと推測される。対象者のうち226名(87.6%)の学生が、学校や部活での人間関係に最も重きをおいていると答えており、支えられている人間関係の多くも学内での人間関係であることがうかがえる。SPの生活形態(自宅・下宿・寮・その他)による違い($F(3, 254) = .271, n.s.$), 男女差($t(256) = -1.83, n.s.$)は、いずれも有意ではなかった。

FC役立ちとの関連を見ると、FCが自分にとって役に立っていると思っている学生ほど、大学での適応感が高く、学内に力を発揮できる機会が多く、学校を誇りと思い、大学に入ってから自分が成長したと感じていることがわかった。自由記述回答においても、「FCで得た信頼関係が大学生活を充実させている」、「FCによってコミュニケーション能力や人との関り方を学んだ」、「FCによる積極性向上が生活に役立っている」といった回答が相当数みられ、SPがFCをきっかけとして獲得・向上していったことがうかがえた。自己成長に関しても、主に、高校までの環境からの大きな変化は、人間関係の広がりであり、その変化に対応しようとする努力、その過程で新たな視野や理解が得られること、こ

れまでよりも興味のあることに取り組める機会が増加したことからの積極性の向上などの記述がみられた。スポーツ大学という特性から、部活内での人間関係の重要性も高いことが理解できるが、多様な種類のSPを獲得・向上させるには、部活に限定せず、クラスの仲間や教員との幅広い人間関係の構築が必要であると思われる。

なお、勉強への悩みや不安は劣等感の無さや大学生生活満足度と有意な負の相関がみられた。先行研究が示すとおり、大学適応の二大要素は人間関係と学業であり、学業面へのサポートについてはFCとは別のアプローチとして展開していく必要がある。学業への不安と被信頼に有意な負の相関が見られたことから、学業成績が学生内の人間関係にも影響している可能性が示唆される。両方のバランスのとれたサポートが初年次教育には重要といえる。

4. まとめ

本研究の結果から、FCがその後の大学生生活の適応・充実に貢献する可能性が示唆されたといえる(ただし、勉強面を除く)。これは、先述した近田(2007)の提唱する初年次教育の3要素(大学生活への適応、基礎的学習スキル、人格の形成)のうち、大学生活への適応と人格形成との関連が示されたことになる。

また、本研究では、大学生活への適応・充実に関る指標として社会的被支援を提案したが、大学適応や大学生生活の満足度との関連性が示されたことから、一定の妥当性が確認された。しかしながら、因子構造とそれに基づく下位尺度についての再検討・修正の必要性も示唆された。とくにスポーツ大学という特性が影響していると推測されるデータ分布の偏りなどもみられた。例えば、社会的被支援尺度の「自分の行う趣味やスポーツなどの活動を同じように楽しんでいる人がある」の平均点が非常に高く、正規分布していなかった

ため削除することとなった。

今後はこのような大学の特性も考慮して調査・分析を進める必要がある。他大学との比較においては特に配慮が求められる。また、大学適応の2大要素としての人間関係と学業だけでなく、スポーツ成績なども本学特有の要因として検討する必要があるだろう。

以上を踏まえ、本研究を効果測定へと発展させ、初年次教育としてのFCが大学生活への適応・充実へ貢献する可能性を追求していきたい。

引用文献

- 1) 明石茂生 (2002) オリエンテーション・プログラムの変遷. 大学時報, 5 (282), 82-85.
- 2) Bell, B. (2006) Wilderness orientation : Exploring the relationship between college preorientation programs and social support. Journal of Experiential Education, 29 (2), 145-167.
- 3) Caplan, G. (1974) Support system and community mental health. Behavioral Publications : NY.
- 4) 近田政博 (2004) 初年次教育の日米比較—特質と課題—. 大学教育学会誌, 26 (1), 44-49.
- 5) 近田政博 (2007) 初年次教育の質をどう高めるか—目標設定・評価指標・実践手法—, 大学における初年次・導入教育最終報告書. 早稲田大学教育総合研究所.
- 6) Cutrona, C.E. & Russell, D.W. (1987) The provisions of social relationships and adaptation to stress. Advances in Personal Relationships, 37-67.
- 7) Gass, M. A., D. E. Garvey, et al. (2003) The long-term effects of a first-year student wilderness orientation program. Journal of Experiential Education, 26 (1) : 34-40.
- 8) 濱名篤 (2005) 新入生の適応と不適応はどのような経験から生まれるか—学習面と対人関係を中心に—. 大学教育学会誌, 27 (1), 31-36.
- 9) 濱名篤 (2007) 日本における初年次教育の位置づけと効果. カレッジマネジメント, 145, 5-9.
- 10) 出野慶子・関島英子・工藤美智子・宇良俊二・梶原祥子・斎藤益子 (2003) 新入生オリエンテーションキャンプの評価. 東邦大学医学部看護学科・東邦大学医療短期大学紀要, 17, 34-45.
- 11) 黒澤毅・宮本友弘・豊田則成・伊原久美子・中野友博 (2004) 大学キャンプ実習が大学生のEQ (情動知能) に及ぼす影響. 日本野外教育学会第7回大会抄録集, p.102-103.
- 12) 太田弘一 (2010) 初年次教育の意義と課題. 教養と教育, 10, 41-55.
- 13) 岡田涼 (2006) 学習への動機付けと友人関係への動機付けとの補償効果—大学生活への適応感に及ぼす影響—. 学校カウンセリング研究, 8, 9-16.
- 14) 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応間とその規定要因—青年用適応間尺度の作成と学校別の検討—. 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 15) Weiss, R. (1974) The provisions of social relationships. In Z. Rubin (Ed.), Doing unto others. Prentice Hall : Englewood Cliffs, NJ, pp.17-26.
- 16) 山田礼子 (2007) 学生の教育評価結果を蓄積し教育改善に役立てる. カレッジマネジメント, 145, p.30-33.

